

静岡・城山遺跡

- 1 所在地 静岡県浜名郡可美村阿原・川北
- 2 調査期間 一九八〇年（昭55）一月～三月
- 3 発掘機関 可美村教育委員会
- 4 調査担当者 山下 晃、辰巳 均
- 5 遺跡の種類 地方官衙跡
- 6 遺跡の年代 七～一四世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

城山遺跡は、伊場遺跡の北西約二五〇mに位置する。遺跡は一九四九年に国学院大學によつて調査され、多数の墨書き土器、施釉陶器、富寿神宝等が出土したことから、官衙跡と考えられてきた。

一九七七年になって、遺跡一帯に造成計画が起つたため、可美村教育委員会の要請により浜松市博物館が範囲確認調査を実施したところ、木簡、墨書き土器、陶枕（唐三彩）等、注目すべき資料が数多く検出された。また、遺跡は中間部分は明らかでないものの、出土遺物・立地等から見て、伊場遺跡とは一連の遺跡と考えることが可能と思われた。

そこで一九七九年度から二ヵ年継続で、開発予定地五〇〇〇m²を対象とした本調査が実施されることになり、初年度の今年は、遺構の

存在が予想された北側部分一六〇〇m²について発掘調査を実施した。

遺構は、調査区北側部分において、官衙中心部の東南部にあたると思われる高さ三〇cmほどの基壇状をした整地面が検出された。遺構全体の形状は遺構の大部分が未調査区に入つてしまつたため明らかではないが、調査区内では、東南のコーナーにあたる部分と南縁を約四五mにわたつて確認した。この基壇状をした整地面の造成年代は奈良時代前半と考えられる。しかしこの面からは平安時代前半の土壤が一ヵ所認められただけで、奈良時代の建物跡などは検出できなかつた。また、この整地面の南縁から約二m南に、南縁とほぼ並行して、約五〇cm間隔で並ぶ杭列があり、整地面東南隅にあたる場所にも杭の密集部分が認められた。いずれも整地面に伴う遺構と考えられ、その存在が注目された。

木簡の大半はこの整地面の南縁斜面から出土した。調査区南側一帯は草炭層や泥炭層が堆積する低湿地で、ここからは木簡とともに、奈良時代中葉から平安時代中頃にかけての須恵器、土師器、墨書き土器（二〇〇点余）、綠釉陶器、灰釉陶器、唐三彩（陶枕三個体分）、陶馬、土馬、円面硯、平瓦、銅製壺鏡、木製品（簷串、舟形木製品、馬形木製品、火切り臼、曲物、下駄、大足）など、多くの遺物が出土したが、いずれも整地面から投棄された状態を示していた。また、この低湿地の堆積土は数層に分かれていたが、木簡はおおむね奈良時代中葉～後半の遺物を伴う層中から出土した。

なお、中世の遺構として、調査区北側を東西方向に横切る幅4m、深さ〇・八mの溝があり、この溝内からも漆器椀や常滑焼の甕などとともに木簡二点が出土している。

8 木簡の釈文・内容

城山遺跡からは、今回の調査で出土した三四点を加え、これまでに三九点の木簡が出土している。このうち前回の調査で出土した五点については、すでに『木簡研究』創刊号で紹介した。今回出土の木簡では、具注曆木簡や月生木簡などが注目される。また、年紀、地名、人名、数量などが記載された木簡も遺跡の性格、年代等を知るうえで大きな手懸りとなりうる。

なお、本簡の内容については、調査が現在継続中のこともあり、
また、資料の整理、検討も充分でないので、別の機会にゆづりたい

伊査大院跡遺學國

奇玉・新倉館跡

『伊場遺跡—西遠地方に於ける低地性

一九五三年

〔浜名郡可美村城山遺跡範囲確認調査概報〕

一九七八年

- | | | |
|---|-------|-----------------------|
| 1 | 所在地 | 埼玉県児玉郡美里村大字南十条字新倉 |
| 2 | 調査期間 | 一九七七年（昭52）十一月～一九七八年三月 |
| 3 | 発掘機関 | 美里村教育委員会 |
| 4 | 調査担当者 | 菅谷浩之・岡本幸男 |
| 5 | 遺跡の種類 | 居館跡 |
| 6 | 遺跡の時代 | 室町時代 |

遠距の田舎

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

所會館は講習改善事業に伴う調

卷之三

本館についての記録はなく、一塙

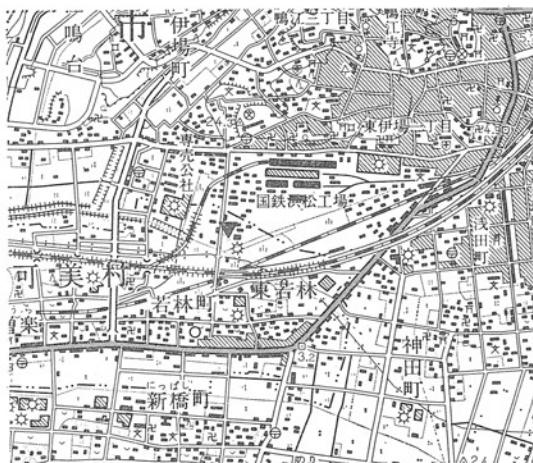
卷之三

卷之三

新倉館は構造改善事業に伴う調査によって発見された館であり、本館についての記録はなく、『埼玉の城館跡』にも記載されていない。ただ伝承として、江戸時代に屋敷が存在していたとも言われている。

館は標高七六メートル程の平坦地に位置し、周辺は畑と水田であり、たまたま内堀の部分が方形に水田として残っていたため、分布調査の際に注目したのが発端である。

館の存在するこの地域は、当初の計画では削平する予定であつたが、館跡であることが確認されたため、一部を調査して保存することになった。



城山遺跡木簡出土地点図